

第76回日本皮膚科学会西部支部 学術大会を終えて

(2024年9月7・8日)

※あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）とWeb配信のハイブリッド開催

久保 宜明

徳島大学大学院医歯薬学研究部皮膚科学分野教授

はじめに

第76回日本皮膚科学会西部支部学術大会を2024年9月7・8日に徳島市・あわぎんホール(徳島県郷土文化会館)で開催させていただきました。前週に全国的に猛威をふるった台風10号の影響をなんとか逃れることができ、晴天に恵まれたのは幸運でした。今回も学会員の先生方の利便性を考え、5会場のうち2会場はライブ配信ありのハイブリッド開催といたしました。おかげさまで、約600人の先生方に徳島にお越しいただき、Web参加を含め約850人の先生方にご参加いただきました。

テーマ

皮膚科領域の昨今の治療法の目覚ましい進歩と鳴門の渦潮のイメージを重ね、テーマを「皮膚科学の潮流」としましたが、各セッションでテーマに沿った期待以上のご講演・ご発表をいただきました。「西部研究の潮流」1, 2では、西部支部の比較的若い14人の先生方に現在行っている研究を発表いただき、議論も活発で、専門医志向に傾きがちな若手皮膚科医にも大いに刺激になったことと思います。2021年度文化功労者の中村祐輔先生(国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所 理事長)には、ヒトゲノム計画の実践から、重症薬疹の発症を予測するゲノム個別化医療、そして高度化、複雑化、多様化、個別化した医療の質を、医師自身のQOLにも配慮しながら確保し、患者さんに思いやりに満ちた医療を届けるという目標に対して、デジタル化・

AI化を用いた具体的な方策をご講演いただきました。私の故郷の阿南市でご開業の馬原文彦先生(馬原医院理事長)には、札幌医科大学で心臓移植に関わられたご経験をはじめ、日本紅斑熱の発見から今年でちょうど40年、約半世紀にわたる壮大なスケールのお話を賜りました。著名な先生方にテーマを大きく包括する、医学の過去から現在、そして未来へとつながる「医学の潮流」についてご講演いただき、たいへん感銘を受けました。

運営

懇親会は徳島駅隣接のホテルで行いましたが、徳島駅から学会場は徒歩約8分、会長招宴会は車で約5分・徒歩約20分のところでしたので、猛暑下にご参加の先生方にはご負担をおかけしたかと思います。会長招宴会場まで、徳島駅からシャトルバスをご用意しましたが、第2便に全員をお乗せできないという事態が生じ、急遽折り返し第3便でお迎えに行くことになり、お待ちいただいた先生方にはたいへん申し訳ございませんでした。

会長招宴会と懇親会には、こちらで選んだ日本酒と焼酎を持ち込みました。懇親会では徳島の代表的な日本酒(今小町、鳴門鯛、瓢太閤、芳水、三芳菊／五十音順)各2本をご用意した結果、すべて空いた品はなく、残量から人気ランキングを知ることができました。予想外にランキング1位が、私イチオシの今小町だったことは嬉しく思いました。

懇親会の中ほど、徳島でもっとも有名な娯茶平(ごじゃへい)連に阿波おどりをお願いしました(図



図1 懇親会での阿波おどり

- a: 徳島でもっとも有名な娯茶平連が出演
b: 先生方を巻き込んだ参加型のパフォーマンス

1). コロナ禍前の学会同様、ご参加の先生方に阿波おどりをご体感いただけたのはたいへんよかったと思います。協議のうえ、学会参加時の服装をクールビズに限定しなかったので、阿波おどりをとくに心配していましたが、懇親会場をほぼ一周踊ったにもかかわらず汗をかくことはなく、服装はぎりぎり許容範囲だったのかもしれません。



おわりに

徳島大学皮膚科学教室員一同(図2)で尽力いたしました、不慣れなため多々ご不便をおかけしたと思います。この場をお借りしお詫び申し上げます。最後に、学会でたいへんお世話になりました、日本皮膚科学会大会運営チームの皆様、ご賛助いただきました多くの企業の皆様、お役目をお引き受けくださった先生方、ご参加いただきました先生方には心より感謝申し上げます。

図2 教室員一同と

